

りこうなまほうの鳥

昔むかし、北のハンガイの山の中に、りこうなまほうの鳥がいました。この鳥は人間の言葉を話すことができました。これまでたくさんさんの王や領主や金持ちたちが、なんとかしてこの鳥を自分のものになりたいと考えました。けれども、何度家来や召使いをつかわしても、だれもつれ帰ることはできませんでした。ふしぎなことに、鳥は逃げさるわけでもなく、一万年も前から美しい葉が風にひるがえっている赤松のえだにとまって、ただ美しい歌をさえずっているだけでした。それでも、つれ帰ることはできなかったのです。

さて、東の民を支配していたインテゲル王が、りこうなまほうの鳥のうわさを聞ききました。そして、

「なんとふしぎな鳥だ。だれもかれもこの鳥にだまされて、つかまえられずに帰ってくるとは。わたしがみずから行って、なんとかしてつれて帰ろう」といって、出かけていききました。

インテゲル王は、はるばる北のハンガイまで行き、一万年も前から美しい葉が風にひるがえっている赤松の木の下にやってきました。りこうなまほうの鳥は、逃げようとせず、おとなしく王につかまりました。王は、たいへんよろこびました。

王が、けわしい道をもどっていると、りこうなまほうの鳥が話しかけてきました。

「気高い王さま。わたしをつかまえることはむずかしくありませんでした。でも、あなたの国に着くまで、つぎのふたつのことを守ってください。さもないと、私はすぐにとんで逃げます。ひとつは、わたしたちふたりのうちのひとりだけが、いつも歩きながら話をする。もうひとつは、あなたが、なにがあっても悲しまないことです」

インテゲル王は、
「そうか、それならおまえが先に話をしろ」といいました。すると、りこうなまほうの鳥は、

「はい、王さま。では、お聞かせします」といって、話しはじめました。

「この地方に、若い獵師が、年とった母親といっぴきの犬といっしょにくらしています。ある日、獵師は、犬をつれて狩りに出かけました。すると、山のとうげ道で、銀を

いっばいつんだ荷車が、こわれて立ち往生おうじょうしていました。荷車の持ち主は、とほうにくれてすわりこんでいました。ふたりはあいさつをかわして、むかいあつてすわり、しばらくたばこをふかしていました。やがて、荷車の持ち主は、

『わたしは下の村へ行って、車大工よを呼んでこようと思います。そのあいだ、この荷車を見はつてもらえませんか』といました。猟師は、

『わかりました。そうしましょう』と答えました。荷車の持ち主はたいそうよろこんで、とうげをこえていきました。

荷車の持ち主は、夜になつてももどつてきませんでした。猟師は、

(こまつたな。こんなおそくなつてしまった。母さんは目が見えないから、何も食べないで待つてるにちがいない)と思ひました。そこで、犬に、

『わたしは家にもどつて、お母さんにごはんを食べさせてくるよ。おまえはここで、荷車の持ち主が帰ってくるまで、見はつておいで。盗賊ぬすたちになにも盗まれないようにね』
とつて、家にもどりました。

犬は、主人のいいつけを守つて荷車の番をしていました。つんである銀や、荷車にながれため牛を盗まれたりしないように、荷車のまわりをぐるぐる回つて見はりました。夜がふけたころ、やつと荷車の持ち主が、車大工を見つけてもどつてきました。すると、猟師はいなくなつていて、犬だけが忠実ちゅうじつに荷車を守つていました。荷車の持ち主は、『おまえは、ほんとうにいい犬だなあ。さあ、これがお礼だよ。持つてお帰り』とつて、犬の口に銀を一まいくわえさせてくれました。

犬は走つてかえりました。そして門のところまで猟師を見つけると、くわえていた銀を猟師の足元におきました。猟師はおどろき、悲しみました。

『わたしは、あの男の荷車をよく見はるようになつたじゃないか。それなのに、おまえは、つんであつた銀を盗んでしまつたんだ』

猟師はそうつて、こん棒ぼうで犬を打ちころしてしまつたのです」

りこうなまほうの鳥がここまで話したとき、インテゲル王は、

「それはいけない。そんなよい犬をまちがつてころすとは、なんということだ」とつて、悲しみました。すると、りこうなまほうの鳥は、

「そうです。あなたは悲しんでいらつしゃいます」とつて、あつというまにとび去つてしまいました。インテゲル王は、

「いったいどうして、悲しまないというやくそくをやぶってしまったんだろう」といって、たいそう後悔こうかいしました。そして、またはるばるハンガイにもどっていきました。

インテゲル王は、一万年も前から美しい葉が風にひるがえっている赤松の木の下の行き、りこうなまほうの鳥をつかまえました。まほうの鳥は、

「では、お話をお聞かせします」といって、話しはじめました。

「むかし、この国に、ひとりの女がいて、ねこを飼かっていました。ある日、女は、いずみに水くみに出かけるときに、『ゆりかごのぼうやをよく見ておくれ』と、ねこにいました。

ねこが、ゆりかごのそばに横になって赤んぼうからハエを追っていると、大きなねずみがあらわれました。ねずみは、赤んぼうの耳をかじろうと、そっと近よってきました。ねこは、おこつてねずみにとびかかりました。ところが、ねこがねずみを追いかけていくすきに、もういっぴき、太ったねずみがやってきて、赤んぼうの耳をかじりました。赤んぼうは大声をあげて泣なきました。ねこは、びっくりして引きかえしてくると、太ったねずみにとびかかってころしてしまいました。そのとき、女が帰ってきて、赤んぼうが耳をかじられて泣いているのを見ました。女は、かんかんにおこつて、

『わたしは、ぼうやを見ていてといったじゃないの。それなのに、おまえはぼうやの耳をかじってしまったんだね』といって、ねこを打ちころしてしまいました。それから、あたりを見まわして、太ったねずみが赤んぼうの耳をくわえたままころされているのを見つけました。女は、まちがってねこをころしてしまったといって、わっと泣きだしたそうです」

インテゲル王はこの話を聞いて、「ああ悲しいことだ」となげきました。そのとたん、りこうなまほうの鳥はとび去ってしまいました。

インテゲル王は、もういちどハンガイにもどっていきました。そして、一万年も前から美しい葉が風にひるがえっている赤松の木から、りこうなまほうの鳥をつかまえて、けわしい道を帰っていきました。りこうなまほうの鳥は、もうひとつ話をしました。

「ある年、日照ひでりがつづいて大地がひからび、大きなさいなんがやってこようとしていました。この国に、アルバイという男がいて、

『もつとましな土地をさがして、平和に幸せにくらそう』といって、旅に出ました。けれども、歩いていくうちに、あつい太陽にやかれ、口ものどもからからにかわいて、一

足も歩けなくなりました。アルバイが、高い岩の足元にすわって死ぬのを待っていると、ポトツ、ポトツと、水の音が聞こえました。見ると、岩の先から水が一滴、また一滴としたりおちていたのです。アルバイはよろこび、小さなさかずきを取りだして、水を受けました。水は、さかずきにいっぱいになりました。アルバイが水を飲もうとしたとき、とつぜん、カラスが一羽とんできて、羽でさかずきをたたき落としました。水はぜんぶとび散ちってしまいました。

アルバイは、たいへんおこりました。

『天は今、私をあわれんで水をめぐんでくれたのだ。それなのに、あの悪いカラスめは、この死にそうなる人間をすくってくれないのだ』

アルバイはそういって、カラスに石を投げつけました。石は当たって、カラスは死んで落ちました。アルバイが、カラスの落ちたところへ行ってみると、岩のさけ目から、冷たいわき水がほとばしり出ていました。アルバイは、はらっぱい水を飲みました。

アルバイが、荷物を取りに引き返してきて、ふと見上げると、岩の上で大蛇だいじやがねむっていました。大蛇の口からは、つばがしたり落ちていました。アルバイは、

『ああ、さつき水だと思ったの大蛇のつばだったのだ。カラスは大蛇どくの毒からわたしをすくってくれたのだ』といって、カラスをころしたことを泣いて後悔したということです」

りこうなまほうの鳥がここまで話すと、インテゲル王は、

「ああ、カラスは、ほんとうにかわいそうだ。自分の親切が分からない人間を助けようとして、ころされたのだ」といいました。りこうなまほうの鳥は、

「あなたは、また悲しんでいますね」といって、とび去りました。

インテゲル王は、

「もう、よそう。あの鳥をつれ帰るなんて、わたしにはできないことだ」といって、そのまま国へ帰っていきました。

出典 『語りの森昔話集1おんちよろちよろ』村上郁再話

原話 『世界の民話9』笹谷雅訳／ぎょうせい